

犬のアトピー性皮膚炎

人のアトピー性皮膚炎は、「慢性に経過する痒みおよび炎症を伴う皮膚炎で、多くの場合アトピー性素因を有する」と定義されています。アトピー性素因とは、低容量のアレルゲン(抗原)に反応して IgE という抗体を産生しやすい遺伝的な体質の事を示します。犬の場合も同様に遺伝的素因が関与する痒みを主とした皮膚炎と考えられ、IgE 抗体や IgG 抗体の産生異常に起因する慢性皮膚疾患と理解されています。ただし、人と犬では異なる点も多くありますので、全て同様とは考えないで下さい。

アレルギーの機序

皮膚あるいは吸入などにより体内に入った抗原をマクロファージが取り込みます。これによりリンパ球の種類である B 細胞が刺激を受け、その抗原に対する IgE 抗体を産生します。この反応を抑制する細胞がありますが、アトピー性素因を持った動物は産生抑制があまり働かないために、IgE 抗体が大量に産生されてしまうのです。このようにしてできた IgE 抗体は肥満細胞と結合します。この状態は感作状態と呼ばれ、再び侵入してくる抗原を待っている状態です(図 1)。

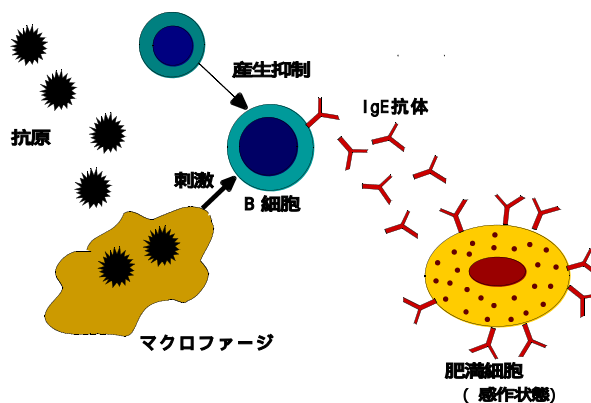


図 1

次に再び抗原が侵入し、IgE 抗体と結合すると、肥満細胞からヒスタミンなどのアレルギー誘発物質が放出され、痒みが生じます(図 2)。この反応は Ⅰ型アレルギーと呼ばれている反応で、アトピー性皮膚炎において主となる反応なのですが、実際は、IgG 抗体が関係する Ⅱ型やリンパ球が関係する Ⅲ型と呼ばれるアレルギーのタイプも関与すると言われています。

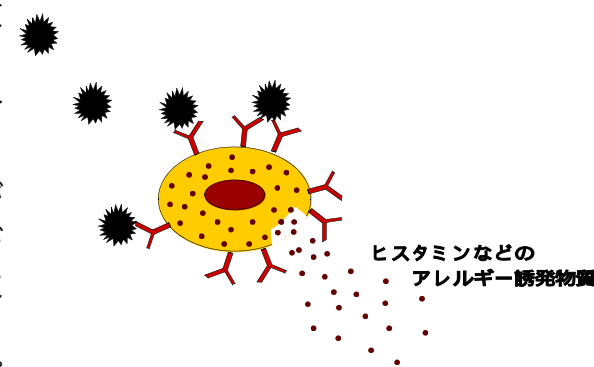


図 2

好発犬種

柴犬、シーズ、ヨークシャテリア、ビーグル、ゴールデンリトリバー、ラブラドルリトリバー、ジャーマンシェパード、シェットランドシープドッグ、マルチーズ、ミニチュアシュナウザー、ダルメシアン

症状

激しい痒みが特徴です。皮膚の病変が認められる場合もありますが、初期は皮膚病変が見られずに痒みだけを訴えるのが一般的です。しかし、これが継続すると続発疹と呼ばれる様々な様相を示すようになります。肢端皮膚炎、結膜炎、耳の痒みなどはよく見られる症状です。また、皮膚以外の臓器にアレルギー症状が出ることはほとんどありません。

初発年齢は、平均 1 から 2 歳ですが、3 ヶ月から 7 歳までと広い年齢層です。一般的に初発後、加齢に伴い悪化してきます。

診断

診断は、病気を示唆する既往歴があること、典型的な臨床症状があること、鑑別診断が除外されていること、によって行います。アトピー性皮膚炎の診断は、アレルギー試験陽性が必須との誤解も多くあり、この試験で判断している動物病院があるのも事実です。しかしこれは間違いです。皮内反応試験、血清アレルギー特異的 IgE 抗体試験（詳しくは、別項目のアトピーの検査方法を読んで下さい。）は共にアレルギーを特異的に診断するものではなく、皮膚や血液中に特異的 IgE 抗体が存在していることを検出しているだけです。ただし、上記のによりアトピーと診断された犬にこのような検査法を行い、アレルギーの種類を把握することは、生涯の管理にとって有益だと考えられます。

鑑別診断としては、食事性アレルギー、感染症、接触性皮膚炎、ノミアレルギー性皮膚炎があげられます(アトピー性皮膚炎の犬は、食事性アレルギーも含まれる場合があります)。

治療

初期治療と維持治療に分けられますが、初期治療は二次感染の治療を含み多種多様ですので、維持治療の記載をします。ただし、ここに記載した治療法が全てではありませんので誤解のないようにお願いします。

- ・抗ヒスタミン薬；人の場合は中心的な薬になりますが、動物での反応はあまりよくありません。通常、抗ヒスタミン薬のみで痒みのコントロールは困難ですので、他剤との併用薬として使用します。

- ・コルチコステロイド；痒みのコントロールとして最善ですが、強い副作用が問題になります。一般的に犬の場合は、この薬の内服が治療の中心になりますので、併用療法を行い痒みがコントロールされる最低量で用いる必要があります。

- ・漢方薬；コルチコステロイドの減薬を目的として、当院では漢方薬を併用します。また、漢方薬単独で良好になるケースもあります。

- ・食事管理とシャンプー；食事性アレルギーがある場合はその蛋白源を避けますが、一般的には、良質で低アレルギーのフードを与えます。粗悪なおやつ類はよくありません。また、適切なシャンプーを行うことはアトピー性皮膚炎を管理するうえで、非常に重要です。シャンプーは体表に付着したアレルギーを除去し、皮膚表面のバリア機能を良好にする目的があります。

- ・サプリメント；必須脂肪酸が有効な場合もあります。

- ・その他；特殊な治療法として、減感作療法などがあります。

アレルギーの回避

アレルギーを完全に回避することは不可能ですが、軽減する努力は必要です。

- ・チリダニの場合；まめに部屋の掃除をして下さい。掃除機の場合は、チリダニをまき散らしていることもありますので、完全にブロックできるタイプの物が良いと思います。洗濯できる物は、まめに洗い、布団やクッションは日干ししてよくたたいて下さい。
- ・花粉の場合；窓はできるだけ開けないようにし、空気清浄機を使用して下さい。散歩に出る時間は花粉ができるだけ空気中に舞っていない早朝や夜が良いと思います。